

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	20 / 2006 / 9-17
タイトル	青森県の植物(1)ー海辺の植物《高野崎～龍飛崎》ー
著 者 名	二唐壽郎

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

青森県の植物(1)

海辺の植物《高野崎～龍飛崎》

第7代 二 唐 壽 郎

1. 青森県の海岸の地理的条件

青森県は東に太平洋、西に日本海、北に津軽海峡と三方海に囲まれているため海岸線の延長は746.418kmにも達しこれは日本全国で15位、東北では第2位となっている。これは、青森県庁から東京の日本橋まで達する距離に当たる。

海岸線が長いということは、必然的にそこに生えている植物の種類が多いという恵まれた条件を備えていることになる。



[図1] 青森県の概略図

2. 海岸の形態

海岸の状態は、大きく二つに分類される。

1. 砂 丘 八戸種差海岸など
2. 断 崖 津軽半島高野崎～龍飛崎など

3. 砂浜の植物分布

1. 波打ち際 波で打ち上げられた海藻、魚類の死骸等により一時的に窒素分が多くなる。そこには、窒素分を好むオカヒジキ、ハマハコベ等が生え、窒素分が無くなるとほかの場所へ移動する。
2. 砂 浜 長い地下茎深い根を張る植物が生えている。ハマヒルガオ、ハマボウフウなど
3. 砂浜の砂の移動が止まる場所
砂浜にコウボウムギ、ハマニンニクなどの植物が根を下ろし砂の移動が止まるとハマナス、黒松などが生え始める。

4. 断崖の植物分布

海面に近いところから

キリンソウ、ハマボウス、アサツキ、オオバナミミナグサ、ハマツメクサ、スカシユリ、ラセイタソウ

5. 海岸の変遷

昭和30年～40年頃までは蓬田の海岸は砂浜が続き自然のままの海岸が残されていたが、その後海蝕を防ぐため護岸工事が進み蓬田村の玉松海岸から蟹田、平舘海岸まですっかり整備され海水浴場に姿を変えてしまい、陸奥湾沿いの砂浜は、ほとんど無くなってしまった。

高野崎～鍔釜崎～龍飛崎の主な花

※色は花の色

植 物 名	科	場 所	6月	7月	8月	9月	10月
スカシユリ	ゆり科	高野崎	●	●			
エゾスカシユリ	ゆり科	〃	●	●			
ハマボッス	さくらそう科	〃	○	○			
アサヅキ	ゆり科	〃	●	●			
ノハナショウブ	あやめ科	〃	●	●			
キリンソウ	べんけいそう科	〃	●	●			
イブキボウフウ	せり科	〃	○	○			
ヒロハクサフジ	まめ科	〃	●	●			
ハマエンドウ	まめ科	〃		●	●	●	
ハマヒルガオ	ひるがお科	〃		●	●		
エゾノコギリソウ	きく科	〃		○	○		
エゾオグルマ	きく科	〃		●	●		
ハマナス	ばら科	〃		●	●		
コハマナス	ばら科	〃		●	●		
ノイバラ	ばら科	〃		○	○		
ナミキソウ	しそ科	〃		●	●		
センニンソウ	きんぼうげ科	〃		○	○		
ハマハイシヤジン	ききょう科	〃		●	●	●	
エゾオオバコ	おおばこ科	〃		●	●		
コモチレンゲ	べんけいそう科	〃					○
コハマギク	きく科	〃					○
トウオオバコ	おおばこ科	鍔釜崎		●	●		
トウゲブキ	きく科	〃		●	●		
ラセイタソウ	いらくさ科	〃		●	●		
ニッコウキスゲ	ゆり科	龍飛崎	●	●			
キクニガナ	きく科	〃		●	●		
エゾノコギリソウ	きく科	〃		○	○		
エゾマツムシソウ	まつむしそう科	〃			●	●	
イブキジャコウソウ	しそ科	〃			●	●	
ハマフウロ	ふうろそう科	〃		●	●		
カノコソウ	おみなえし科	〃	●	●			
ハマベンケイソウ	むらさき科	〃		●	●		
エゾカワラナデシコ	なでしこ科	〃		●	●	●	



[図2・写真1] 高野崎

それでは、襲月海岸の高野崎を中心に龍飛までの海岸の様子と海辺の花を紹介する。

高野崎について

国道 280 号線沿いに駐車場がありキャンプ場が有る。食堂の北側に 2 年前に立派な階段ができ浜へ降りることができるようになった。浜は礫の海岸が 20 メートルばかり続きすぐに崩壊堆積岩植生になりそれに続いて岩隙植生そして海岸草地植生となっている。

昨年新しい灯台が完成した。灯台の両側は写真でわかるとおり柱状節理の切り立った断崖になっている。灯台を過ぎるとさらに階段がありそれを下るとやがて階段は左右に分かれ左側の階段を下ると

岩場になり岩隙植生植物が 6 月から 10 月下旬まで季節ごとにきれいな花を咲かせる。階段の右側を下ると、赤い太鼓橋が二つ架かり観光の場所となっている。

主な花の紹介

説明は、花の構造などは図鑑で見てもらうことにして、花の名前の由来を中心に書いた。花の名前は、なかなか覚えにくいものだが、和名の漢字や語源を見るときなると納得することが多く、名前も覚えやすい。

スカシユリ・エゾスカシユリ(ゆり科) 和名 蝦夷透百合

高野崎の花はスカシユリから始まる。6 月下旬から 7 月上旬にかけて崖を埋め尽くすスカシユリ。スカシユリに混じって蕾に毛が生えているエゾスカシユリも見ることができる。スカシユリの語源については、やぶなべ会報 19 号の表紙説明に書いたので省略する。花が大きく色も鮮やかで、紺碧の海をバックに咲き乱れる様子にしばし写真を撮るのを忘れて目を奪われてしまう。それにしてもあの断崖絶壁でしかも岩の隙間に根を下ろし、潮水をかぶり、荒れ狂う海風の中の悪条件の中かくもきれいな花を咲かせるものだと、驚くばかりである。



[写真2] エゾスカシユリ



[写真3] スカシユリ



[写真4] スカシユリ

ハマボッス(さくらそう科) 和名 浜払子

払子とは僧侶の持つ仏具。

花は6月頃から7月頃が最盛期であるが10月中旬頃咲いているのを見たことがある。

[写真5]



ハマエンドウ(まめ科) 和名 浜豌豆

浜に咲く豌豆。波打ち際から離れた崖下に咲いている。あちこちの砂浜海岸にも咲いているが、高野崎では波打ち際から離れた崖下の砂礫に咲いている。場所によって色が薄い物、濃い物があるが、高野崎のものは特に紫が濃いものが多い。

[写真6]



コハマナス・ハマナス・ノイバラ (ばら科) 和名 小浜梨・浜梨・野薔薇

牧野新植物図鑑では、食べられる丸い実を梨になぞらえたものでハマナシ(浜梨)が正しくハマナス(浜茄子)ではないとしている。東北人がシをスと発音するために生じた誤称であるとしている。コハマナスは、ハマナスとノイバラの雑種で近くに必ずハマナスとノイバラがあり不稔性である。花の大きさもハマナスとノイバラの中間くらいで、色もハマナスより薄いピンクである。ハマナスは、手前の階段を下った海岸に、ノイバラとコハマナスは東海岸に咲いている。



[写真7] ハマナス



[写真8] コハマナス



[写真9] ノイバラ

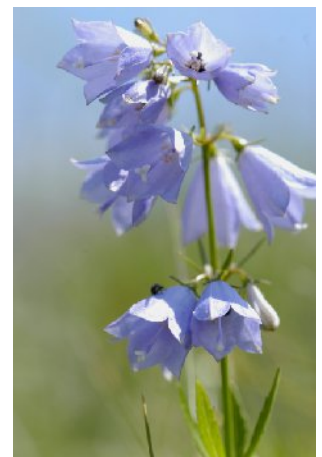
ハマハイシャジン(ききょう科) 和名 浜這い沙参

沙参とは釣り鐘にんじんの意味が有る。

浜を這っている釣り鐘にんじんの意。高野崎の突端北側の階段の途中に咲いている。

花期が長く7月～9月頃まで咲いている。

[写真10]



コモチレンゲ(べんけいそう科) 和名 子持ち蓮華

親株からたくさんのランナーを出して増えるのでこの名がある。この植物は多肉の多年草で一稔草(花を咲かせると枯れてしまう)植物である。北側の突端の岩場に咲き眼下に30メートルほどの断崖が迫り写真を撮す時思わず足がすくむ。10月中旬が花の盛りでコモチレンゲの花が終わると高野崎の花は終わりを告げる。 [写真11]



ラセイタソウ(いらくさ科) 和名 ラセイタ草

ラセイタというのはオランダ語(Raxeta)で布のラシャのことで、葉の表面が縮れてその様子がラシャに似ているから付けられた名前。花よりも葉に特徴があるから目に付く。岩場の高いところに咲いている。 [写真12]



ナミキソウ(しそ科) 和名 浪来草

花の形がいかにも大きな浪が打ち寄せる時の形に似ている。濃い紫できれいである。高野崎手前の階段を下りた礫地に生えている。 [写真13]



キリンソウ(べんけいそう科) 和名 麒麟草

麒麟とは、動物園にいる首の長いキリンではなく古代中国の想像上の動物で、キリンビールののについている麒麟の商標といった方がわかりやすいと思う。体は鹿、尾は牛、ひづめは馬、額は狼、頭に角1本、口から火を吐き走るのが速い。古代中国では、聖人が出て良い政治を行うと麒麟が現れると言われている。葉の形が麒麟の鱗に似ているから付けられたと言われている。崎の手前の階段を下りた崖に咲いている。 [写真14]



アサツキ(ゆり科)

和名 浅葱

海岸のほか原野でもよく見られ、春先食用にする。

浅葱色というのはこれから来ている。葉が浅い葱の色をしていることからついた。

海岸の岩の隙間に根を下ろしている。

[写真15]



ノハナショウブ(あやめ科)

和名 野花菖蒲

これも、海岸のほかには原野や乾いた湿原などに群落している。

高野崎の灯台を過ぎた崖の上の草原に咲いている。

ベンセ湿原に群生しているのはよく知られているが、高野崎の崖の上で、海をバックにして咲いている花は平地の物より写真のいい被写体になる。

[写真16]



コハマギク(きく科)

和名 小浜菊

ハマギクより花が一回り小さいから。ハマギクの茎は1mにもなり下部は木質化している。

津軽半島、下北半島の海岸に群生を作っている。海辺の花もコハマギクが咲き終わるとシーズンが終わる。種差海岸には、コハマギクとハマギクが混じって咲いている。

[写真17]



ハマヒルガオ(ひるがお科)

和名 浜昼顔

砂地に長い地下茎をのばし水分を蓄えている。高野崎の手前の階段の崖に群落を作って咲いている。



[写真18・19]

ハマベンケイ(むらさき科) 和名 浜弁慶

名前の通りすこぶる強い植物である。

8月龍飛の南側の岩の上で咲いていた。夏の直射日光に照らされてさすがにぐったりしていたが、岩に手を付けたらやけどしそうな熱さだった。おそらく50℃はあったのではないかと思われた。海辺の花は、おしなべて強い物が多い。

[写真20]



エゾノコギリソウ(きく科) 和名 蝦夷鋸草

葉の形がのこぎりの刃のようにぎざぎざしているから。龍飛の海岸に群生している。



[写真21・22]

トウゲブキ(きく科) 和名 峠落

峠に生える落。

鑄釜崎の崖の途中に咲いている。高野崎から2kmしか離れていないのに、崖は粘土質になっていて植生ががらりと変わっている。

[写真23]



エゾカワラナデシコ(なでしこ科)

和名 蝦夷河原撫子

撫子とは、花がかわいくて、つい子どもを撫でるように撫でてしまいたくなることから。

龍飛には、カワラナデシコも咲いている。カワラナデシコは、萼筒の長さが2~3cm、苞2対。エゾカワラナデシコは、萼筒の長さ3~4cm、苞3~4対。

[写真24]



ハマフウロ(ふうろそう科)

和名 浜風露

牧野新日本植物図鑑では、フウロは語源不明となっている。やぶなべ会の顧問だった葛谷孝先生は『北の街』に連載している『津軽野の花・山の花』151.152.153 にフウロについて詳しく解説しているのでそちらを見て欲しい。エゾフウロとハマフウロがありエゾフウロの方は、萼片に開出毛が密生している。

[写真25]



エゾオグルマ(きく科)

和名 蝦夷小車

花が小さな車に似ているから。

平地に生えるオグルマと比べて葉が厚く表面にクチクラ層が発達して光沢があり太陽の強い光を反射している。蕾の時白い毛で覆われている。

[写真26]



エゾマツムシソウ(まつむしそう科) 和名 蝦夷松蟲草

牧野新植物図鑑では、詳細不明としている。やぶなべ 19 号の表紙の解説に詳しく書いたのですがここでは、名前の由来についての諸説を述べる。

- ① マツムシの鳴く頃に咲くから。しかしマツムシの鳴く頃咲く花は、ほかにもたくさんあるからおかしい。
- ② 花が終わって花びらが散った後の形が仏具の「まつむし」に似ているから。わたしは、この説に賛成する。(下右端の写真参照)
- ③ 謡曲の「まつむし」に出てくる人魂の色に似ているから。



[写真27・28・29]

イブキジャコウソウ(しそ科)

和名 伊吹麝香草

伊吹山にたくさんありいい匂いがするから。

エゾマツムシソウの写真を撮っていたとき、いい匂いがするので足下を見たらこの花を見つけた。花が5mm位で小さいく、地面を這っているので匂いが無ければ気がつかなかった。

[写真30]



※ 下北半島、種差海岸、七里長浜の植物については、紙面の関係でこの次の機会にする。

参考文献

牧野新日本植物圖鑑
みちのく海辺の植物
津軽、野の花、山の花
津軽半島の植物
龍飛岬の四季
みちのく植物図鑑
青森県植物誌(青森県植物風土記)
西津軽の植物
岩崎村の植物
半島花紀行(草木に語る写真集)写真

牧野富太郎
葛谷孝著
葛谷孝著(北の街)
井上守著
龍飛野草の会編
石川茂雄著
中沢潤編
西津軽郡教職員組合編
岩崎村教育委員会編
木下哲夫